

楊偉兵著

雲貴高原の土地利用と生態変遷

(1659—1912)

野 本 敬

こんにち環境破壊は様々な局面で人類の生存を脅かす世界的な問題となっており、急速な経済発展を遂げた中国においては更に焦眉の急となっている。中国の場合、環境問題はきわめて現代的な課題であると同時に、長期の歴史的経緯を背景としていくから、過去の事態の解明に鑑み現在の状況を考える一助とする傾向が強く、中国における「環境史」研究を推進する要因の一つとなっているといふことができるだろう。

目下中国では「環境史」に関する定義が定まっているとはまだ言い難いが、一九九三年に開催された「中国生態環境歴史学術討論会」での議論が今日に至る中国環境史の基本的な方向性を定めたといえよう。以来、南开大学中国社会史研究中心に代表される疾病・公共衛生など社会史の見地や、中国人民大学清史研究所をはじめとする災害史の方面、また陝西師範大学や復旦大学歴史地理研究中心などに代表される歴史地理の分野など、複数の拠点でさまざまな

分野から積極的に研究が進められていく⁽⁵⁾。また開発に伴う環境変遷については言うまでもなく多数の研究があるが、近年では動物分布の変化から開発と環境変遷を読み解く研究など、その研究領域はさらに広がりをみせつつある。

本稿で紹介する楊偉兵氏による『雲貴高原の土地利用と生態変遷 (1659—1912)』は、そのうち歴史地理をベースとして登場した環境史研究の成果である。著者は中国雲南省の白族出身であり、現在、復旦大学中国歴史地理研究所にて副教授を務め、目下国家清史編纂プロジェクト・地理志チームの中心メンバーでもある新進の研究者である。本書は氏の学位論文を元に鄒逸麟主編による「50年来環境変遷與社会応対叢書」中の一冊として刊行された。

本書で取り扱う中国西南地域に位置する雲貴高原は、山地・盆地・河谷、河川、湖水などそれ自体変化の大きい複雑な自然環境下にある地域単位である。そこはがんらい非漢族の居住域であったが、大量の中国内地からの移民の流入とその活動により、現地の生態環境は大きく変化することとなった。ただ地理的位置から長らく中国世界において周縁と位置づけられ、研究上も辺境地域としての地政学的研究や民族学・民族史研究が主であり、これまで精緻な社会経済史的研究が蓄積されてきたとはいえない。中国西南地域が、社会史や環境も含めた社会経済史の対象として着

目され、研究が推進されるようになったのは二〇世紀九〇年代以降のことになる。

本書で著者は歴史的な土地利用の変化に着目し、政治・経済・社会的変動を背景とした人間の活動と、自然環境の相互作用の結果として環境史を描き出すことを試みた。全体の構成と概要は以下の通り。

緒論 生態システムと地域歴史地理研究

上篇 清代雲貴高原の経済と社会

第一章 雲貴高原の生態環境と開発の基礎

第二章 清代雲貴高原の経済開発と社会変遷

中篇 清代雲貴高原の土地利用情况

第三章 清代雲貴高原土地利用の主要な分布

第四章 清代雲貴高原土地利用の局地的事例

下篇 清代雲貴高原の環境変化と生態系の対応

第五章 清代雲貴高原の土地利用変化の促進要因

第六章 清代雲貴高原生態変遷の地域的対応

緒論ではまずこれまでの生態システムと地域史研究に関する見解が整理される。そのうえで著者は雲貴高原の歴史的な土地利用変遷を考察するにあたっては、人為的な土地資源の開発・利用の促進要因の探求が重要であるとし、それは自然条件や人口・経済・技術・政治制度などの背景により、各要因が相互に媒介変数的に影響しつつ決定づけら

れる性質のものであるとする視角を提示する。分析にあたっては、史料上の数値データに加え、後世の調査資料やフィールドワークで得られた知見をも援用しつつ定量分析を行い、歴史事実の復元を試みる。

まず上篇（第一章・第二章）では自然環境など環境変遷に関わる基本データを提示し、清代までの雲貴高原の情況と環境に変化を及ぼす背景を示す。第一章ではまず雲貴高原の生態環境と開発の基盤について、自然地理及び清代までの歴史的経緯について解説する。雲貴高原は山地が大部分を占め、数少ない盆地が平地にあたる地勢であり、気候は海拔により大きく規定される。こうした地形的条件は人間の居住及び生産活動を規定する要因でもあった。歴史的に雲貴高原は一三世紀まで非漢族の支配地域であり、中国世界に編入され開発が本格的に開始されるのは明代に入ってからであった。現代に至る劇的变化は第二章以下で述べる清代以降の直轄地化「改土帰流」によりもたらされた。

行政区分など政治制度の面だけでなく、地域社会に王朝権力の支配が及んだことで中国内地からの大量の移民を引き寄せることとなり、彼らの農業・鉱業、林産など様々な開発活動によって地域の生態系は大きく様相を変えていくこととなる。

その具体的な事例及びデータの分析が行なわれるのが中

篇(第三章・第四章・第五章)である。第三章では清代雲貴高原の土地利用状況および分布を考察するにあたって、具体的なデータを分析する。耕地の構成や類別、面積などの基本的データの検討により農業の状況を、銅、銀、鉛、錫など各鉱山の生産量や分布から鉱業の状況を、そして林産資源や牧畜、また商業交易の中継地としての集落の分布が明らかにされる。その結果、清代において大量の移民による活動が政治的或いは技術的な要因と組み合わせり、実に多様な土地利用形態と結果としての環境変化に繋がっていったことが指摘される。

そこで第四章では清代雲貴高原における土地利用の具体的事例として、①雲南中部の盆地地区とその周辺の水利工程②貴州省清水江流域の木材交易とそれに伴う土地利用の構造③雲南東北部・四川南部・貴州西北部交界地域の山地農業及び鉱山開発が取り上げられる。その結果、盆地地域では水利事業の展開により農業開発がより促進され、また林産交易地域では地域の自然条件にあわせ生存と経済的利益を構造的に維持する生業モデルが形成されるが、鉱山地区では大量の移民を吸い寄せ、同時に生計の維持及び鉱業生産のため周囲の森林の破壊を招いたことなど、雲貴高原の土地利用の進展と利用限界においてそれぞれ異なる様相を呈したことが提示された。

第五章では最も重要な清代における雲貴高原の土地利用の相違と環境変化をもたらした要因について、気候や地形・水系、災害といった自然的要因、及び社会、制度、人口、市場、文化など人為的要因とから検討する。著者によれば、①土地利用を規定する最も基本的な条件である常態的な自然条件や突発的な災害に、②直轄地化を皮切りとした社会制度の変化や鉱山開発などにより増加した移民とその活動などの社会経済要因が加わり、さらに③農業や水利の技術・商品化経済の進展・人口変動などによる文化的要因が関わるかたちで、三つの要因の相互作用が土地利用の状況と多様な変化を決定づけていったとする。

下篇(第六章)では清代における人口増加と開発の結果もたらされた環境変化の影響と、伝統社会がそれに対して如何に対応し、措置を講じたかを描き出す。過度の開発に伴う環境破壊は植生の破壊をもたらし、それに伴う水土流出や水不足など人々の生活を脅かす数々の災害をもたらしたが、一方で水利分配、森林保護などを記した碑刻などに見られるように、官・民挙げて管理を行なう制度的措置を喚起するものとなった。このように本書は全体を通じて中国西南地域における土地利用変化の促進要因と環境変化との複雑な相互作用について理解が得られるようになっている。本書は以上に述べた通り、主に清代以降の雲貴高原にお

ける土地利用の歴史の変遷について、自然地理的条件と人為的開発の影響との相互作用による環境変遷の問題を、政治・社会・経済の変化を背景として堅実に描き出した好著といえる。これまで西南地域においては、網羅的に社会経済的なデータを分析し、政治制度の変化・経済変動・技術移転や人口変化などとの相互的な関わりから人間の営為と自然環境の相互作用を問うかたちの研究は類をみなかった。その点で本書は新たな段階を切り拓いたものといえよう。敢えて望蜀の願いを付け加えるとするれば、本書は土地利用の側面から環境変遷を考察するものである性格上、史料を博搜してもともと不完全なデータを極力整合させての分析が主となった。その労苦は多とするものの、一方でそうした数値があらわれてくる背後のプロセスの分析についてやや手薄になった感がある。また、今回土地利用の事例として第四章でとりあげられた三つの類型は、雲貴高原に代表的なものとはいえ、著者も述べるのとおり、当時の中国全体の経済システムに接続されていく過程で更に多様な様相を示したと考えられ、今後の更なる事例研究の蓄積が俟たれる。より豊富な事例の蓄積に基づき、数値データの背後にある具体的な個別事例のプロセスを加え総合的に検討することで、更に状況を立体的に描き出すことが期待できるであろう。

また、本書では雲貴高原の開発の進展を、主に中国との関わりから分析するに止めているが、やはり本書で扱った時代を考えれば、一九世紀後半以降の周辺諸国との関係に言及しなかった点は惜しまれるところである。雲南省は古くからビルマ、ヴェトナムなど東南アジア諸国と密接な関係を有するだけでなく、近代において欧米列強の影響の下、世界経済システムに接続されていくことが歴史的に重要な意味をもつ。例えば近代雲南経済の牽引役となった錫鉱山開発は明らかに国際経済システムの中で加速したものであり、欧米勢力にとつての中国西南地域への進出が中国市場と結合する意図にあったことを考えれば、雲貴高原の位置づけは、中国市場の中で後背地的に開発が進む側面だけでなく、東南アジア世界と中国世界の結節する場として考えることができる。その意味では一九世紀後半以降の時期を、中国内地の動向だけでなく周辺諸国の動向も合わせ地域経済・環境に影響を与える要因として取り上げることが必要ではなかっただろうか。この点は今後さらに探求する価値がある。とはいえ中国西南地域については実証的な社会経済史研究そのものがまだ緒にいたばかりであり、今後より精緻な研究の蓄積のうえで更なる発展を期すべきなのかもしれない。

すでに本書のほかにも西南中国地域に関する環境史とし

てそれぞれ異なるアプローチにより陸続と成果が生み出されており、今後この分野でさらに詳細な事例研究が蓄積され、新たな知見が得られることが期待される。

註

- (1) 劉翠溶「中国環境史研究鄒議」『南開學報』(哲学社会科学版)二〇〇六年第二期、高国荣「什麼是環境史?」『鄭州大學學報』(哲学社会科学版)第三八卷第一期、二〇〇五年一月。

- (2) 詳細は劉翠溶・伊懋可主編『積漸所致 中国環境史論文集』中央研究院經濟研究所、一九九五年(英文版: Elvin, Mark & Liu Tsui-jung (eds.), *Sediments of Time: Environment and Society in Chinese History*, New York: Cambridge University Press, 1998) 参照。

- (3) 例えば余新忠『清代江南的瘟疫與社会 一項医療社会史的研究』中国人民大学出版社、二〇〇三年など。日本においては飯島渉『ペストと近代中国』研文出版、二〇〇〇年や上田信「細菌兵器と村落社会 中国浙江省義烏市崇山村の事例」見市雅俊・斉藤修・脇村孝平・飯島渉編『疾病・開発・帝国医療 アジアにおける病氣と医療の歴史学』第一〇章、東京大学出版会、二〇〇一年所収な³。

- (4) 例えば李文海・夏明方主編『天有凶年 清代災荒與中国社会』生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇七年や侯甬堅「鄂爾多斯高原自然背景和明清時期的土地利用」『中国歴史地理論叢』二〇〇七年四期、曹樹基主編『田祖有神 明清以来的自然災害及其社会対応機制』上海交通大学出版社、二〇〇七年など。とくにこの分野では中国古代史における進展が顕著である。日本での研究を含めた近年の動向については村松弘一「秦漢環境史の現在」『歴史評論』六九九、二〇〇八年を参照。

- (5) 中国における環境史研究の動向については陳新立「中国環境史研究的回顧與展望」『史學理論研究』二〇〇八年第二期、王利華「中国生態史学的思想框架和研究思路」『南開學報』(哲学社会科学版)二〇〇六年二期などを参照。

- (6) 例えば上田信「中国における生態システムと山区經濟—秦嶺山脈の事例から—」宮嶋博史他編『アジアから考える(6)長期社会變動』東京大学出版会、一九九四年所収、武内房司「清代雲南焼畑民の反乱—一八二〇年永北リス族蜂起を中心に—」『响沫集』七、一九九三年、Vermeer, E. B. "The mountain frontier in Late Imperial China: Economic and social developments in the Dabashan," *T'oung Pao*, Vol. LXXVII, 1991な³。中国の研究は多数あるが、

先駆的なものとして藍勇『歴史時期西南経済開発與生態変遷』雲南教育出版社、一九九二年を挙げておく。

(7) 例えば上田信『トラが語る中国史 エコロジカル・ヒストリーの可能性』山川出版社、二〇〇二年や、Evin, Mark *The retreat of the elephants: an environment history of China*, New Haven: Yale University Press, 2004など。

(8) 歴史地理と環境史の関係については邁克尔・威廉斯『環境史與歴史地理的關係』『中国歴史地理論叢』二〇〇三年四期、二〇〇三年二月ほか参照。

(9) 例えば Giersch, C. P. *Asian Borderlands: The transformation of Qing China's Yunnan Frontier*, Cambridge, Harvard University Press, 2006や藍勇・黄漢生「燃料換代歴史與森林分布変遷——以近兩千年長江上游為時空背景」『中国歴史地理論叢』二〇〇七年二期など。

(10) 武内房司「近代雲南錫業の展開とインドシナ」『東洋文化研究』第五号、二〇〇三年三月参照。

(11) 例えば氣象災害の歴史研究を試みた楊煜達『清代雲南季風氣候與天氣災害研究』復旦大学出版社、二〇〇六年、疫病と開發の關係に着目した周瓊『清代雲南瘴氣與生態變遷研究』中国社会科学出版社、二〇〇七年、朱聖鐘『歴史時期涼山彝族地区經濟開發與環境變遷』重慶出版社、二〇〇七年など。

楊偉兵『雲貴高原的土地利用與生態變遷（1659—1912）』上海人民出版社、二〇〇八年、三五八頁＋v＋iii＋vi
(帝京大学非常勤講師)